
弱虫のてのひら

swan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弱虫のてのひら

【Nコード】

N0965R

【作者名】

swan

【あらすじ】

マムIIレム王国。

能力者（超能力者に近い）が存在し、軍が管理している。

その軍からドジばかりする、シンが抜け出した。

案の定、迷子になり国境沿いの森でこの国には存在しないはずの村にたどり着く。

そこでシンを保護してくれたのはオリビアという女の子。

でも、村の中は異様な雰囲気。

よそ者を嫌う村人、館に閉じこもったままの村をおさめるお館様。

シンはこの村で何を見つけるのか？

序章

大きな国、マムⅡレム。

隣国との戦争、資源の減少傾向、長い乾季。

それに伴う国家の傾き。

王は頭を抱えた。

来る日も来る日も。

ある日、王は側近から不思議なことを聞く。

未来を見る事のできる男がいる、と。

王はすぐさまその男を城に連れてこさせた。

兵に引き立てられたみすばらしい男は、王を見ると呟いた。

『自分は、王に仕える為に馳せ参じた。』

驚く王に彼は、未来を予言した。

『この国に沢山のチカラが現れる』

それが、全ての始まりである。

— — — — —
— — — — —

マムⅡレム王国の王都レアムドザインは、今、乾季をむかえている。

街は色鮮やかで、通りは沢山の人や物が溢れてにぎわっていた。露店には、沢山の木の実が盛られ、美しい生地（うしじ）の布が並ぶ。

しかし、通りからそれて路地にある建物では、あることが起きていた。

四角い建物の一番奥の部屋は狭く薄暗く陽光があまり入っていないかった。

揃いの黒ずくめの男が五人、輪を描くように立ち、中心に豪華な服を着る男が一人椅子に腰掛けている。

皆、中年と言って良いほどの年齢だ。

ただ一人を除いて。

黒い軍服を着た一人が前に出る。

この男だけ右袖についている腕章が違った。二羽の鳥が交差しそれぞれ別の方向をむいている。

まだ十代の半ばといった感じで幼さの残る顔立ちだ。

焦げ茶色の艶々した髪と薄い紫の大きな瞳の柔らかい気弱そうな顔には、到底黒い軍服がそぐわなかった。

「ブランデル国会会議長さん。どうやら、いけない物を見てしまったようですね。あんまり欲をかくからこうなるんですよ」

そう言われ、椅子に座っていた男、ブランデルが顔を上げる。そ

の顔は、驚きに染まっている。

「…シン。で、では君があのコエケシなのか？」

シンと呼ばれた少年は、否定も肯定もせず唇を歪める。まるで幼い子供の仕草のように首を傾げると男に手袋を外して手を伸ばした。

「や、やめろ！」

制止を聞かずブランデルの頭に触れる。途端に男から表情が消え、気絶し前に倒れこむ。

すかさず周りにいた男達がブランデルを受け止めて別の部屋に運び出した。

「…」

一人、部屋の中で口元を押さえて立ちすくむシンに、白髪が混じるもののかくしゃくとした男が声をかける。

「シン。大丈夫か？」

「ああ、とっても気分が悪いんです」

そう言う彼にさらに心配そうな顔をして男がシンに触れた途端、シンは決まりごとのように手を彼の頭に回した。

「えっ？ 何を…」

そこまで言って気絶した彼をそのまま床に倒し、シンは素知らぬ顔で部屋を出た。

「ファイさん。ちょっといいですか？」

一人何か書き留めている男にシンは声をかける。
にっこり笑うと、シンは彼に近づき：

数分後、黒い上着を脱ぎながら建物から出てきたのはシンだけだった。

「へーやるじゃんか、全員食べたのか。美味かった？」

突如、建物の屋根から声をかけられてもシンは歩きながら答える。

「…苦いだけだよ。何？ 見学に来たの、キフィ？」

逆光でよく見えないにも関わらず相手が分かっているようだった。

「よく言うね。俺がいなかったらどうしようにもなかったくせに」

ふらふら屋根の縁を歩きながらその人影はおどけてみせる。

「…脱走の片棒担いだくせに呑気だね」

シンは今まで着ていた上着を投げ捨てて、近くの路地に隠しておいた荷物を取り出した。

「何言ってるの。俺はどうせばれても平気さ。これから頑張るのは

君、特別上級能力士官のシン・ナカムラ」

「…君さあ、軍法会議で縛り首になっても知らないからね」

「なにそれ、ないない。」

物騒なことをけろりと笑い飛ばしていたキフィはシンが着替え終わるのを見ると、屋根から飛び降りた。

金髪なのを除けばシンと大して変わらない年齢と背格好だ。

「おい。シン、これから北の森沿いで国境越えろ。この俺からのありがたいサキヨミだよ。…あと、妹を頼む」

真面目な口調で彼はそう言うと、踵を返して歩き始めた。

「妹ってどこにいるの？」

無駄だろうと思いつつ尋ねる。つかみどころの無い男だ。

「俺はこれから南の戦闘地域に行くから、見送りはここまですな。じゃあな」

シンは諦めたように首を振るとこの日のために新しく買った白い上着で、歩いていく彼とは正反対の方向に歩き始めた。

序章おわり

序章（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ブログで初めて書きあげた小説です。
気楽に見ていただけたら嬉しいです。

一、不幸あれば幸も少し？

この世で一番嫌いなのは雨と暗い場所。

だから、こんな時でも乾季と太陽をこよなく愛するってのに、何故か僕は薄暗い森の奥で雨に降られている。

雨宿りとか、そういうこと考える余裕もない。

「キフィの奴、こんな所を教えやがって。それにしても、腹減ったあー」

呟いた直後に腹の虫が鳴く。

けれど僕の場合、本当は脳みそが鳴いてるのかも。

僕は、このマムⅡネム王国の能力者の一人で、どうしようもない能力を持つてるから…。

それが嫌で軍から逃げてきた。

空腹でぼんやりしながら歩いていると何やら遠目に塀が現れた。

ここは森の中で、確か三日前に通った村がこの国の北端の村だったはずだ。

じゃあ、これは…？

それより、人がいるなら…。

——っつごおおん！

上ばかり見て歩いていたら大きな木の根に足を引っ掛けた上に、石で頭を打ってしまった。

顔の周りが深い水溜りじゃなくて良かった。

痛い。いろんな意味で。

僕って何でもドジなんだろう…体中痣だらけだ…。
キフィにまた笑われる。

ううん、それよりも…もう、意識が…。

—ギシッ！

「オリビア、外の人だよ」

「え？ どこにいるそんなの」

耳元で聞こえる声に少しだけ意識が戻る。

わあ、人間だあ嬉しいな。

でも、なんだか倒れた時より背中が痛いな、雨とかのせいかな。
うーん、上手に力が入らないかも。

「オリビアの足の下」

……。ああ、そうか身体が動かせないのもその所為か…笑えない。

「これ？　嘘お、やってしまったな」

足を浮かせつつ僕の上にいたオリビア―（声が高いから二人とも女の子かな）が呟いた。

「…外の人だけど、仕方ないよね？」

「えっ？　村の中に入れるの？」

女の子が驚きながら尋ねる。

「じゃあ、マキはここにほっとくの？　それで良心の呵責とかないのね」

「もう…オリビア、片方の肩もってよ」

率先して乱暴に、オリビアがシンの右肩に手をかけた。それに倣って躊躇^{ためら}いがちに、女の子が左肩に手をかける。

「…ありが…」

――ドサッ。

やっとの事でお礼を口にした途端女の子と前に倒れてしまった。オリビアが手を離れたのだ。じっと自分のてを見つめていたオリビアに怒りの声が聞こえる。

「オ、オリビアあ！ あんたねえ」

「あっ、ごめんごめん」

すぐにオリビアがシンの右肩を抱え歩き始めた。

けれど、二度目の転倒でまたまた僕は気を失っていた。

シンが次に目を覚ましたのは、どこかの室内だった。ベッドに寝かされているようだ。

「…ビア、いいのかい？ こんな…かもしれねえのに」

「大丈夫。もし…だったら…するから」

女の子が誰か大人の男と話す言葉が途切れ途切れに聞こえる。

「ほら、お願い。やっちゃって！ 私、一度家に帰るからさ」

な、何されるんだ。怖くなり薄っすら瞼を開ける。

どうやら、小さな診療所のようなところだ。

そこには、信じられないくらい不機嫌そうな、筋骨隆々な男が立っていた。

その男と目が合い睨まれる。

「なんだ、目え覚めたんかい？」

僕は、ドギマギしながら答える。

「はい…」

男は近づいてくると、シンを覗き込んだ。瞼を引っ張られる。

「やっぱり、ただの脳しんとうみてえだな。起きろ、ざっと見た感じじゃそこまで大きな傷は無いだろう？」

起き上がると前頭部に何やら大きな布を押し当てられた。刺激を感じて顔をしかめる。

「消毒だから我慢しろ。他も見ることから服を脱げ」

言葉に従って服を脱ぎ始めると、男が声を潜めて尋ねる。

「お前え、どこから来たんだ？　こんな森の中に、何をしに」

その様子はどうしても周りを気にしているようだ。狭い部屋なのに何を気にしているのだろう。

「この森を抜けて、隣の国に入ろうと…っいて」

今度は後ろを向かされて、また背中に何か押し付けられる。

シンの背中とは今日昨日ついた傷ではない痣が多くついていてサイモンは顔をしかめたがシンは気付かなかった。

「隣の国？　それにしても方向が違うようだが」

「ええっ、そうなんですか…？　僕、方向音痴なもので…」

「本当か？ お前え、軍の者じゃないのか？」

「違います」

一瞬どう答えようか悩んだが、脱走兵なのだからもう関係ないだろう。軍に対する忠誠なんてこれっぽっちもない。

話している内にまた腹が鳴る。

苦りきった顔でシンは腹を擦る。空腹も限界が過ぎてしまっているようだった。

それまで厳しい顔で足を診ていた男が、表情を崩した。

「本当に行き倒れのようなだな。お前えみたいな細っこい奴が軍人って事は無さそうだ。腹空かして倒れたんだろう？」

少し反抗の気も芽生えるが、赤くなりつつ頷く。

「はあ、まあそんなところです」

全て治療が終わると、真面目な顔で男が忠告する。

「お前が何かしても、しなくても、このプレセハイドはよそ者には厳しいと思うぜ」

「…はあ」

何やらよく分からない事を言われ曖昧に頷いていると、扉から女の子が入ってきた。

「サイモンさーん、どうですか？ あ、起きてはいるようだけど…」

「ああ、腹が減って倒れている所を君が踏んだみてえだ。頭を打ったのと足首を少し捻ってるだけだぜ」

聞き覚えのある声からして、彼女がオリビアのようだ。

日に焼けた金色の長い髪を一つにまとめ、あらわ露になっている顔は小さく白い。

その上に並ぶ瞳は褐色でちょっとつり目、内面もにじみ出ている気は強そうだった。

結構可愛いかも。

僕を踏みつけた張本人だけど！

一、不幸あれば幸も少し？

「ヤダ、私が乗ったのなんでわかったの？」

苦笑いの彼女がサイモンの影にいるシンを覗く。

「大丈夫？」

「まあね」

そう答えたシンに、ふうんと頷いて手を差し出す。

「私、オリビアって言うの。よろしく」

戸惑いつつ手を握り返す。

「僕は、シン・ナカムラ」

握手をする二人を見ていたサイモンが顎を撫でながら尋ねる。

「で、このシンを治るまでどこに置いとく？　まあ、うちで預かって構わないが」

サイモンの言葉にオリビアが、手を上げる。

「それは大丈夫。うちで預かるから」

サイモンが驚いて早口に言う。

「待て、オリー君^{きみ}のところはあれだろう。ラビもいるし、女の子の
家に行かせるのは：第一、こいつこんな顔してるけど男だぜ？」

こんな顔と言われ、シンはちよつとショックを受けながら事の運
びを見守る。こんなときでも反抗できない。

「分かってるよ。大丈夫だって。私が決めたんだからいいでしょ」

オリビアはにつこり笑ってサイモンを見上げた。
サイモンは苦い顔を作るが何も言わない。

「さあ、立って。私の家に連れてくから」

強引にオリビアは、シンを立たせる。

「でも、僕、いいんですか？」

戸惑ってサイモンを見るとオリビアに頷く。

「オリビアが決めたことだ。：けど、何もするなよ」

「：はあ。分かりました」

というか、そんな気力はありません。

オリビアはしてやったりという顔でシンの腕を引っ張って行く。
ドアの外に出るとそこには白い空間だった。かなり長い廊下が続
いていて、沢山の医療器具が並ぶ。シンが想像した以上にこの診療
所は大きいようだった。

「…どうして僕を？」

躊躇いがちに尋ねる。

「どうしてって、シンが倒れてたから。でも、この村は外から来た人に厳しいのよねえ」

オリビアは、歩きつつふらふらしているシンが倒れないか振り返る。

「さっきの人も同じ事を…」

「今のサイモンさんも外の人だったけど、馴染むまで何年もかかった」

なんだか、質問が逸らされた気がしたが深く追えずに頷く。

長い廊下には人影が少しあったが、二人を見とめると、隠れてしまった。

その廊下も終わり、オリビアが大きな木のドアを押し開く。折角開けてくれたドアが勢いよく閉まり顔面にぶつかる。

「ドジねえ」

オリビアの呆れた声が聞こえる。

「…」

十分分かっていた事だったため何も言い返せなかった。
シンは涙目で外に出た。

雨は上がったようだった。陽が沈みかけている。大体、この乾季時期にあれだけの雨が降るほうがおかしい。

診療所の前には、一本の整った道が延びていた。

石が一定の形に整えられ敷かれているなんて王都でも中心部だけだ。

「この村、綺麗でしょ」

オリビアに言われ振り向くと、診療所のまっ白の大きな壁はかなりの幅がある。

そちらに感嘆しながら、

「すごい。この村にはこんな整った道と診療所があるんだね」

そうシンは答える。

「診療所は小さな単位で、大きい物を病院というのよ。まあ、この村でだけど」

「…知ってるよ。それくらい」

やはり、少しずれた回答をもらいシンは、彼女が自分をからかっているのではないかと見つめた。

それでも、オリビアは素知らぬ顔でシンの腕を引く。

オリビアが歩く方角、西には大きめの広場が見えた。両側に立ち並ぶ家々は全て白い壁に赤い屋根だった。煙突も出ている。後ろを振り返ると、そちらにはやはりまっすぐ延びた道が大きな門にぶつ

かっ
て
い
た
。

あ
れ
が
、
こ
の
村
の
出
口
だ
ら
う
か
。

一、不幸あれば幸も少し？

「シン。この広場が村の中心だよ」

そう言われオリビアを見ると、そこには多くの店が並んでいた。そして、夕食の買い物だろうか、人が一角に沢山集まっている。

しかし、何故か皆シンを睨んでいるか、顔を伏せているかだ。

広場は正方形をしていて中心は噴水になっているが、そこで遊ぶ子供たちは怯えているようにさえ見える。

何なのだろう？ とても気味が悪い。

「気にすること無いよ」

オリビアは人の間をうまくすり抜けると、広場の中で異様に大きい（正方形の北の一边を占める）館に近づいて行く。

あまりの大きさに呆然としてみると、オリビアが呟く。

「ここが、この村を治める人の家だよ。私はここに仕えているんだ」
「すごく大きい」

オリビアは頷きながら、館の前面以外をさらに囲む塀と館の西端の継ぎ目を手のひらで押した。

何をしているのかと思ったら、なんとそこには隠し扉が現れた。

しかし、あまりにも大胆にしているので、村の人は皆知っていることのようなのだ。

「入って」

促されて入ると、小道が館に沿って奥に延びている。しばらく壁沿いを歩くと、裏庭があり小さな家が二つ見えてきた。一つは普通の民家と同じ大きさに二階建て。もう一つは、小ぶりで最初の物の半分くらいの二階建てだ。

オリビアは、小さな家の前で立ち止まった。
オリビアと中に入る。

入ってすぐにあるかまどでは、鍋がかけられ何か煮込まれていた。その横には使い込んだテーブルと椅子四つが並ぶ。後は玄関横に階段。それが、北側にある。南側に暖炉とソファがあつて部屋の内容物は終わり。本当に小さい。

「ここが私の家だよ。あ、その汚い上着は私が預かるよ」
「…そうだね」

ぐるるるるる。また、腹が鳴る。お気に入りの新品をけなされた抗議だろうか。

「お腹減ってるようだね。今、準備するからテーブルについていて」
「ありがとう」

シンは上着を預けるとテーブルの椅子に腰掛けた。

オリビアが忙しそうに料理するのを見てシンは申し訳なく思った。まず、森で拾って貰ったことから感謝すべきなのだが、今は料理。それだけでは腹が満たされる事が無いのが分かっている。

「もうすぐ、家族が揃うからそうしたら食べようか」

そう言い終わらないうちに、幼い子供が扉を勢いよく開けた。

「オ、オリー！ 外の奴拾ったって本当なの？！ どうして、外の奴なんか！」

オリビアは首を振ってシンを指差す。暢気そうな笑顔だった。

「いいじゃない。ほら、可愛い顔の普通の人だよ」

子供は四、五歳で短くそろえた金髪に大きな碧眼をしている。本来愛らしいはずの顔が怒りに染まっている。

「わかんないよ！ 軍人かも知れないよっ」

シンは睨みつけられ首をすくめる。

オリビアは、頭をなでてやると子供に椅子を勧める。

「ほら、座って。私、今日のラビの仕事褒めようと思ってたけどなあ、ラビって意地悪だったんだ。ふーん」

さも残念そうに呟きながら、食卓の準備を始めた。

途端に、子供はオリビアにしがみつき、

「オリー、ごめんなさい。僕、今日上手にできたでしょ？」

すがる様な目で言われオリビアは笑う。

「うん。なかなかだった」

スープとペースト状になった穀物をつぎ分けそれぞれの前に並べられた。これが、この村の主食らしい。

「さあ、食べよう」

食事を始めると、オリビアは少しずつ説明を始めた。

村がプレセハイドと言うこと。広さも、人口もたいして多くない村だということ。

子供の名前が、ラビエルドでオリビアの従弟であるということ。村には銀細工が栄えていること。食糧確保のために塀の外と内に畑を持つこと。

そして、今日は外の畑に行った帰りシンを拾ったという事。

「今日からしばらく、シンはうちにいて静養する事になるからね。ラビ」

そうオリビアが言うと、ラビのみならずシンも驚く。

「ええ?! しばらくう?」

「僕、ここに居ていいの?」

「だって、森越えるつもりだったならちゃんと万全でなきゃ。まあ、それまで色々させるけど。ラビ、仲よくしてね」

オリビアの勢いに飲まれて、シンもラビも頷く。

食後のお茶を始めた所に、扉を乱暴に叩く音が響いた。
お湯の準備していたオリビアに代わり、ラビが扉を開けた。

「あれ？ スターチ、どうしたの？」

「ラビ！ 無事かっ?!」

スターチと呼ばれる十三、四歳の少年はラビをつかまえて尋ねる。

「なーにが？」

後ろからオリビアが呆れ顔で突っ込む。

「だ、だって姉ちゃんがオリビアが外で男拾ったって言うし、村の奴も…」

熱く語っていたスターチは、シンに気づいて黙る。

「こいつなの？」

さっきからずっといるのに気づいてもらえないなんて、自分は影が薄いんじゃないかと、シンは思い始めた。

「どうも。シンです」

スターチはシンに近寄るとポツリ。

「立てよ」

立ち上がると、少しだけシンが高いのを見て。

「お前、年は幾つだ？」

悔しそうに、スターチはシンを睨む。若干たじろきながら答える。

「：確か、十六になったかな」

「あ、私と同じだね」

オリビアが追い討ちをかけるように、言う。

「うう」

シンとしてしまったスターチを座らせ、オリビアはお茶を出す。

ははん。どうやら、オリビアは沢山の人に愛されているようだ。

「このスターチの姉のマキが、私と一緒にシンを運んだんだよ。それに使用人一家でお隣さん」

「ええっと、お姉さんにお礼お願いします」

とりあえずシンは言ってみたが、冷たい目で見返される。

「：あんた、この家のどこに寝んの？」

「そうそう、言い忘れていたわ。ラビの部屋、簡易のベッドなら入るよね？」

オリビアの言葉にラビが立ち上がる。

「そんなぁ！ 僕の部屋で、こいつと？」

「そうだ。ラビが犠牲になる事は無いぞ」

言いながらうんうんと、加勢して頷いたスターチにオリビアは、

「じゃあ、しょうがないあたしの部屋か」

と遠い目で漏らす。

「「駄目！ 何言ってるの！」」

ラビとスターチは首をぶんぶん。

「私、お客様をソファに寝せる気ないからね」

「…分かった。もう、いいよ僕の部屋で」

二階のラビの部屋にシンのベッドが置かれると、念を押すようにスターチが言う。

「オリビアの部屋に絶対入るんじゃないぞ」

「分かってる。そんなに信用できないかな？」

ラビと一緒に部屋で寝るのだから、そんな事を僕はできないと思う。

「できるか。外の奴なんて！ ラビ、こいつのこと見張ってくれよな」

今度はラビを捕まえて言う。

「さあ、寝ようか。スターチも帰って寝なさい」

オリビアに追い払われスターチが渋々帰った。

「シンも疲れているようだし、ラビも程ほどにして寝るのよ」

「分かってるよ」

二階には二部屋しかなく、階段を上がってすぐの西側がラビ、奥の東側がオリビアの部屋になっていた。

「中をいじらないでよね」

そう言われながら入ると、ラビの部屋は、両側の壁を本棚に囲まれていた。

奥にあるラビのベッドが部屋の横幅に納まり、その少し手前で壁に沿っていた本棚が目隠しのように直角に曲がる。ベッドがよく見えなくなっている。

シンがそちらに近づくと、その本棚とベッドの間にはラビサイズの机が納まっていた。

「この本棚から奥には入らないで」

身体をはって威嚇^{いかく}されて、シンは自分のベッドに戻る。横になつてしばらくしても、ラビの領域の灯りは消えない。

「何してるの？ 夜更かしはいけないよ」

尋ねてみると、ラビは、

「勉強。僕は忙しいから話しかけないで」

惘然と答える。

どうやら、シンよりしっかりしていて、真面目のようである。

シンは目を閉じた。

空腹はあまり治まらなかった。

——最後にちゃんと食べたのは、確かとても苦いものだった。

一、不幸あれば幸も少し ? (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

いまさらですが、これは異世界トリップではありません(笑)
主人公はシン・ナカムラでとっても名前は日本ですけど違うのです。

一、不幸あれば幸も少し？

この国には能力者がいる。

一説には百年と少し前に能力者が生まれ始めたという。数は少ないが、時に大きな武器になる。

そこに目をつけた国王が全ての子供を調べさせ、幼いうちから能力向上・研究科学局（通称・能力者の館）に放り込み、能力と軍について叩き込まれる。シンは物心がついて能力が明るみに出た時点で親から引き離されてしまった。

能力にもいろいろある。

重い物を念じるだけで軽々持てる者、雨などを呼び寄せるなどが多い。その他さらに少ない数で特別な能力の者がいる。シンもその一人だった。

シンは、記憶消しの能力コエケンを持っていた。それは、ただ消すのではなく、食べてしまうのだ。生きるために。

幼いころは、親や近くの者が触れる度に記憶を食べていた。

楽しい記憶は甘く、辛くつら苦しい記憶はニガくカラく。それは、記憶もろとも全てシンの中に取り込まれシンの物になる。

軍は、そこに目を付けた。

シンを諜報員として育て、極秘内容の抹消の為にシンを使うのだ。仲間の記憶を食べ、見ず知らずの者の大切な記憶を食べ…。

シンにはそれが耐えられなかった。増えてゆくばかりの負の記憶に。

だから、逃げたのだ。ここまで来るのに、少しだけ他人の記憶を

食べたが、それは自分と関わる部分だけ。少ししか得られないが、苦いだけだった任務と辛さは大して変わらない。

さっき食べた食物も巧くエネルギーしよくもつに変わることは無い。どんなに食べても、脳内の空腹に苦しむのだ。

けれど、何故か僅かではあるが、今日は食べた気がしたのだ。

翌朝、オリビアに叩き起こされる。

「ほら！ ラビも起きてるんだから。それから、これに着替えて」

目を擦りながら立ち上がると、オリビアに服を差し出される。受け取ると、あつらえた様にぴったりだった。

「これ、だれの？」

「ここの主たちのお古。その服が洗いあがるまでしょうがないですよ？」

改めて見ると、自分の服は結構汚れている。昨日のうちに言うて欲しかった。

「ありがとう」

着替えて降りると、ラビが朝食を終えて出て行く所だった。昨日の洋服は簡単な上着と泥がついたズボンだったのに、今日はシャツ

に綺麗な半ズボンだ。

オリビアとテーブルにつく。

「どうして、こんなに早くからラビは出かけるんだ？」

「学校の日なのよ今日は。病院の隣にあったでしょう」

シンはそう言われ驚く。確かに大きな建物は隣に建っていた。

「学校って勉強教えてるのか？ 金持ちなんだなこの家」

呆れ顔でオリビアは、ミルクの入ったカップを渡しながら言う。

「学校は、村の子供が十五歳の成人まで全員行くところでしょ」

「どうも。レアムドサイン王都では、そんな勉強できるのは貴族だけだ」

受け取ってお礼を言いつつもシンは、ふてくされて呟く。

オリビアは立ち上がると、笑って言う。

「今日は午前中、お館様の所にいるからそれが終わったらいろいろ手伝ってね」

「僕、挨拶に行かなきゃいけないね」

そう言うと、オリビアは首を振る。

「お館様は、会ってくれないよ。村の偉い方と数人の使用人にしか会わないんだ。だから、シンの事は私から伝える」

「そうなの？　じゃあ、お願いするよ」

うん、と頷きオリビアは準備を始めた。

「帰って来るまで寝るなり何なりしていてね。ここからは、出ないこと。特に館には入らない。分かった？」

そう言い残してオリビアは館に行ってしまった。

さて、何をしたものか。

家の中のことでもしようかと考えたが、オリビアが全て終わらせてしまっている。

とりあえずは二階のラビの部屋に居ることにした。

ラビの部屋なら大量の書物が置いてある。この先の参考になるかも知れない。いや必要ないか…。

特に勉強ができた割にはそんなに好きじゃなかったシンはため息をつく。

「これ、本当にラビが読んでいるのかな？」

思った以上に難しい本ばかりだ。

そればかりか、目に付く限りこの国の能力者についての本だ。軍にもこんなにはないかもしれない。

一冊手にとって見ると、能力者の発生由来が説いてある。

結構古い本で現代語の内容ではなかったが、シンはあっさり読むことが出来た。別に勉強で語学力を得たわけではない。誰かの記憶の中にあっただのだろう。初めて見るのに初めてではない。そういう経験が沢山ある。

能力者の館では、能力者は国の資源減少に伴い、現れた新しい人材資源と習った。

まあ、信用できないけど。

しかし、この本では、能力者はたかだか百年ちよつとの歴史ではなく、ある一族の持っていた能力が広がった遺伝的ものだとなる。

この説もどうか、と怪しんだシンはある所で目を留める。

「冗談…」

能力者の起源の一族の名前、クレイ。それは、シンの脱走を手助けたキフィ・クレイと同じ姓である。

彼は高い指数の能力の持ち主だ。

平均六歳までに入るはずの能力者の館に十三歳でやってくるといふ、異例の入り方をしていた。

「こんな能力者の一族だったんだなあ、あいつ」

持ち前の人をくった性格でいつも撒いてはいたが、彼にはいつも護衛や見張りのような者がついていた。

きっと一族の血、それ故だったのだろう。シンの脱走のきっかけを作ったのも、キフィの独自の国の体制へ反抗心に影響を受けてだった。

二、雨の後には

「ただいま。シンどこに居るの？」

意外に早い帰りに慌てて一階に下りていく。

「早かったね」

「まあね。今日はあまり仕事が無くて…許可もらって帰ってきちゃった」

肩をまわしながら呟くように言う、オリビアが椅子に座るのを見計らって尋ねる。

「ね、オリビアの主ってどんな人なの？」

自分も向かいの椅子に座り構える。

オリビアが自分に向ける視線が鋭くなって聞くのをやめようか迷ったが粘る。

「…お館様は、まだ若い娘だよ。もともと短命な一族なんだけど、特に今は酷い。両親や一族の者は殆ど亡くなってしまった」

「…その子がこの村を仕切ってるの？」

シンの質問にオリビアの顔が上がる。

「仕切るって？」

少し無然とした物言い。

「村の偉い人にしか会わないって、言ったから。違った？」

何か地雷に足をかけているようだ。慌てて補足を入れる。

「そうね。…事実、お館様はここを仕切ってる。だってここは、彼らの土地でできた村なんだ」

つまり、小さいながらも領主に当たるという事。それを、若い娘が一人で治めているのか。

「ここにはその若いお館様が一人で？」

オリビアが首を振る。

「もう一人、本当は居るんだ。彼女の兄と二人で一つの役を兼ねていた」

「その兄は？」

「この村を出てしまった。仕方の無い事だったけど、お館様には辛い事だったんだろう。この数年は館から出ていらっしやらない」

少し寂しそうな顔でオリビアは呟き窓の外を見る。

つられてシンも顔を向けると外には小雨が降っていた。

「どうして…今は乾季だろう？　まるで雨乞アマゴイいがこの村に居るみた

いだ」

何気なく呟くとオリビアがじっと自分の顔に目を向けているのに
気付く。

「アマゴイ…？」

「ああ、聞いた事無い？ 王都には能力者が沢山居るから乾季には
アマゴイの能力者が雨を降らせて水量を調節していたんだ」

何度か頷くとオリビアが立ち上がり、窓を開ける。

「雨…そろそろ上がるから、外に行く準備して」

「うん。よくわかるね」

シンも立ち上がると、窓に近づく。

「通り雨だから」

見る間に雨は上がり、オリビアに大きな縦長の袋を渡されて、外
に出る。

雨上がりで、空は透明感に溢れていた。

まず、砂だらけの王都ではここまで澄まない。

オリビアに付いて館の表へ出ると、広場から綺麗に対角線状に伸
びる大きな通りの一つを北東に歩く。

広場の北側にあった館の裏に廻り込む様な路地を曲がった。町並
みは急に途切れ、目の前には一面村の塀までの畑が広がる。

「館の裏にこんな畑があったんだね。村があんまり整然と整ってるから意外だ」

歩きながらオリビアに言うと、少し笑っただけだった。

オリビアは何もない畑の前で足を止めると、入って行く。

「オリビア、待っ…」

足早なオリビアに続こうとして泥に足を取られ前のめりに倒れる。派手な音にオリビアが戻ってくる。他の畑にいた村人も顔を上げた。

「どうやらシンは運動できないらしいね」

「…運動は、できるよ。けど、ドジなんだ」

言い訳がましくなると思いつつ訂正を入れてみる。自分で言ってるんだか悲しい。

オリビアが口元に笑みを浮かべると首をやれやれと振り、シンが立ち上がるのを待つ。

「その袋、頂戴。使うから」

「結構重かったよ。何が入ってるの？」

オリビアに手渡すと綺麗に閉じられていた袋の口から小さめの鍬くわが出てくる。

「これで、野菜を作る畑を耕すんだ。これを後から蒔いて来てね」

自分で鋤を持つと、オリビアは袋に入っていた小振りの筒を渡しシンを促す。

シンもそれに従って、しばらく休ませていたらしい畑に鋤を入れてゆくオリビアの後をついて行く。

意外にもシンの作業は堂に入っていた。

オリビアが掘り返した土にシンは手にしていた筒から粉のような物を蒔いてゆく。時折よろけながら。

シンは一心にやっていて大分終わった頃、オリビアに声を掛けられる。

「今日はここまででいいよ。思ったより早く終わった」

隣の畑から声をかけられオリビアは身体の向きを変える。

「キャラおばさん、何か？」

「オリビア、そいつは外の奴だろう？ どうしてこんな所に連れて来るんだ」

一見優しそうなのに、口調はシンに対する憎悪が露だ。

シンは凍りついたように動きを止める。

「大体、こんな時期に外から人が来るほうがおかしいじゃないか」

「おばさん、そんなに嫌わなくたって…シンは旅の途中で行き倒れていたんだよ？」

オリビアがなだめるように言うが、

「そんな事を信じてるのか、オリー。そいつは軍のスパイだ」

キャラの後ろに立っていた息子らしき男もオリビアを責めるように言う。

「いくらオリビアでも、こんな子匿っちゃいけないよ」

「俺が今からこいつ外に出してきてやるよ。行き倒れのわりには元氣そうじゃないかよ、ええ？」

ずかずかと近付いて来た男にシンは不意に腕を掴まれる。

「わっ…」

「待つてよ。確かに外からのスパイはありえるけれど、全員がそうとは限らないでしょう？　これは、お館様が決めた事なのよ、手出ししないで」

それまでの優しい口調は無くなり、オリビアは叩きつける様に親子に告げる。

バツが悪そうに男がシンから手を離す。

「命拾いしやがって」

「善意で言っているのにねえ、この村が不幸になるよ」

吐き捨てるように呟くと二人は畑から立ち去っていった。

「…オリビア。僕は、ここから出て行くべきなんじゃないかな」

どう考えても、オリビアへ非難が集まっている。全部、自分がい
るからだ。

「何言ってるの。ダメだよ、今出て行ったら彼らの思うつぼ」

「でも、オリビアに申し訳ない。僕は快く思われていないから」

二人が歩き去った方向を見つめ真剣にオリビアは口を開いた。

「この村はもう、成長しなくちゃいけない時に来ているんだ。君に
はその薬になってもらうの」

有無を言わせぬ横顔にシンはただ頷く事しかできなかった。

オリビアは、袋にまた道具を詰めなおすと、少し先にある畑から
野菜を数種とってシンを伴って館へ帰った。

三、金の王子様と能力者の性？（前書き）

一話ずつの長さが違います。すみません。

三、金の王子様と能力者の性？

「どうなってるかな〜今頃♪」

砂ばかりが目につく荒れた大地、うだる様な暑さの中で、上機嫌に紡がれた言葉に近くにいた一般兵が顔を上げる。

「何か仰られましたか、クレイ殿」

「いいや、独り言だよ」

キフィ・クレイは、シンと別れた後にその足で南の戦地へ赴いていた。

階級としては、一般兵とは違う枠組みだが、大体のところ彼は少佐といったところか。

南の戦地では、混戦を極めていてやたらな方向に兵を進めるとあっさりと敵に取り囲まれてしまう。

そこで、彼の能力である未来読みサキヨミが重要となる。

しかし、彼の性格は大変周りの者に迷惑をかけることが多かった。直属の部下は一人だけ。あとはその場で適当に揃えざるえない。

いつでもマイペースで呑気な言葉で殺気立った司令部をあっと言う間に爆発させたりするのだ。

それでも、キフィのサキヨミはほぼ確実な読みである為に彼を作戦から外す事は許されない。

困り果てた作戦部隊司令部や一般兵は、特別上級能力仕官としても異例の特別個室を設けた。

本部キャンプに来て数日で、閉じ込められたキフィは呆れて笑っ

だが、キフィの部下として指名された一般兵たちは気が気ではなかった。

特に今は直属の部下が席をはずしている。

こういふときこそ彼が何か変なことをすると噂があるのだから・・。

「しかし、こんな所まで呼び寄せてもあんまり意味無いんだよね。きっと王都からでも俺様ならサキヨミできたと思わない？」

金髪の頭は革張りの豪華な椅子にすっかり馴染みながら、部下を振り向く。

「：私には、能力がございませんからよく分かりかねますが」

「そうなんだよねえ、ここの司令官も俺の事よく分かってない」

いつもの事ながら、あまり本心からの言葉を言わない部下を心底で笑い目を閉じる。

キフィに与えられる兵は大抵キフィの部下ではなく、本当は見張りである。

沢山の囲いの中で、いつも首元にナイフでも突き当てられていると同じだ。ここから逃げた時は解っているな、と。

キフィとしては部下の彼らをなじる気もないし、ましてや誰も“ココ”で責めようとは思っていない。

今このような態度をとる事でこれから起こるであろう事にも耐性を作っているに過ぎないのだ。

目を閉じて一点を思い浮かべると、彼の中にビジョンが現れる。

それはさっきまで覗いていた前線などではなく、大事な人の未来だった。

「あれ？　これって…」

ずっと黙々と夕食を食べていたシンが、突然声を上げた。

「何か変な物入ってた？」

オリビアが、すかさず尋ねる。

「あ、いや。なんでも」

シンは慌てて首を振る。

ここでオリビアに聞いても多分、分からないだろう。なにせ、昨日からの違和感の答えに今、初めて気づいたのだから。

食事に、味を感じたのだ。シンが食べるのは記憶であって、物質ではないから舌はほぼ味覚を感じないようにできている。

しかし、昨日の薄味から今日は強烈なまでの味を感じる。つまり、閉じていた能力を尖らせてみると植物の記憶（成長過程）を食べているようだった。

信じられない出来事に戸惑いつつも、とりあえず食べられるだけ夕食を詰め込んでみた。

夕食が終わると早めに引き上げさせてもらい、ベッドに横たわる。

目を閉じて自分の頭に右手をかざす。

すると、瞬く間に今まで貯めこまれた記憶が現れる。シンの中で、それは本棚のように並び敷き詰められている。人それぞれに違う記憶の持ち方をしているので、いつもコエケシをするときは、手をかざしてそこからいつも記憶を見つけ出し引き抜くのだ。

しかし、今回はその作業をすることなく、それも、初めて植物から記憶を食べた。これから、この事について研究すれば、いつか、人から記憶を消してしまわずに済むかもしれない。

並んだ記憶の中に、紛れるようにして入った植物の記憶を手にとると確かに消化されてシンの記憶になってしまっている。

幸運に驚きながらも、久々に感じる甘みや旨みに満腹感を感じてシンは、そのまま眠りについてしまった。

遅れて部屋に戻ってきたラビは、気持ちよさそうなシンの寝顔を一瞬睨んで、

「どうして、オリビアはシンなんかの為に…」

そう呟くと奥の机に向かった。

三、金の王子様と能力者の性？

朝早くに叩き起こすのがこの家のルールなのか、力いっぱいバンバンと叩かれて目を開けると、枕元にラビが立っている。

「ほら、起きてよ。僕は忙しいんだから」

不機嫌にラビは言うのと、部屋を出てゆく。

朝早いと思ったが、太陽は随分と上まで来ていた。

階段を下りると、すでにオリビアは館の仕事に出かけたらしくラビしか居ない。

「朝ごはんはちゃんと食べろ、ってオリビアが」

「ふーん。ラビは今日学校無いのか？」

一緒にテーブルにつくと、シンはとりあえずラビに尋ねる。

「関係ないでしょ。僕、今日はお仕事に行かなきゃいけないんだ」

やはりあまり打ち解けるつもりは無いらしく、そっぽを向く。

「はは、そうなんだ。行ってらっしゃい」

苦笑いをしてそう言うと、ラビが顔を戻す。

「シンもいくんだよ」

大層不満気に呟く。

「オリビアがそういうから仕方なく、だよ」

後は話す気も無いらしく全て食べてしまうと、立ち上がり準備を始めた。シンも慌ててそれに倣う。

やはり、今日も記憶まで食べることができた。

「そこに置いてあるの、シンの着替えだから」

ラビが指差したソファの上にはシンの白の上着とその下に着ていた服が並んでいる。洗いあがったのだろう。

「…その白いのは、着ないほうがいい。裾が汚れるから」

早速、袖を通そうとしていたシンに厳しくラビが告げる。まるで立場が逆である。

「…はい」

ラビの後を付いて行くと、広場を抜け、入り組んだ道を南に向かって歩き村の塀にたどり着く。その間に、ラビと同じくらいの子供達が仲間に加わっていた。

塀には村の裏門にあたるらしい勝手口がありそこから外に出る。

どうやら、オリビアが言っていた村の外にある畑らしい。塀を見ると自分が目指していた壁とよく似ていた。扉は巧妙に木の陰に隠

れていたが。

「今日は何をするんだい、ラビ？」

尋ねると、ついて来るようにと手招きされてある畑に向かう。

そこにはまだ根を張り始めたばかりらしい、植物が並んでいた。見覚えがある野菜に思わず目がいつてしまう。

「これに、水をあげるのがシンの仕事」

「水？ どこにあるの」

ラビは、畑の先を示す。

すでに何人かの子供や自分と同じくらいの少女がしゃがみ込んでいた。

「あそこに小川が流れてるんだ」

なんとこの森には乾季でも小川はあるらしい。

「分かった。がんばるよ」

にっこり笑って答えると、また転んだりしないように慎重にそこまで行く。

皆、シンが近づくとさっと身を引いて離れてゆく。

しかし、シンはできるだけ笑顔で近くにあったバケツに水を汲むと畑に少しずつ水をまく。それも根の部分に慎重に手馴れた手つきで。

それを見ていたラビより少し大きい少女がシンの服を引く。

「ねえ、どうして少ししか水をあげないの？」

「ん？ それはね、この植物はあまり与え過ぎてはいけない種類だからだよ。知ってる？ これは丁度いい水加減だと凄く甘くなるんだ」

シンが丁寧に答えて見せると、周りで聞いていた子供達も寄ってくる。

「どうしてこの育て方を知ってるの？」

「今年初めて植えたんだよ」

「隣の国の商人さんにもらったんだよね」

子供の好奇の目にあい、とりあえず答える。

「僕は、この国の東から来たんだけど、僕の家もこの植物育てていたんだよ」

子供は首を傾げて、たずねる。

「じゃ、じゃあ、お兄ちゃん軍人じゃないの？」

「まあね、農家の息子かな」

ちよつとはぐらかして答えると、心の中で皮肉に付け加える。農家で軍に売られた息子が本当だよ、と。

いろんな植物や野菜について教えている間に子供達とシンは打ち解ける事ができた。

しかし、外の畑に出てきていた大人たちは、苦々しい顔で遠めに見ているだけ。

しばらくして、ラビや子供達が遊び始めたのを横目に水遣りをしていたシンはふと、顔を上げて思う。

何か、嫌な感じがするな…ざわざわする感じだ。それは長年培った勘だ。残念ながら自分の事には通じないが。

小川の方で遊んでいた子供達を振り返るとまさに、女の子が近くにあった若い木と共に小川に落ちた瞬間だった。

慌てて、駆け寄る。

大した深さではないが、先ほど見た感じでは流れが急な所があった。

少し先回りをして、腰まで水に入る。女の子は水に飲まれて流され、一緒に落ちた木の枝に足が挟まっていた。女の子を抱きかかえると、木を引き剥がす。

「大丈夫？」

何とか這い上がって声をかける。

水を飲んでしまったのか返事がない。

横を向かせると背中を強く叩いて水を吐かせる。何度か繰り返すと大量の水を吐いた。

やっと女の子が声を出す。

「…足が痛い。怖かったよう…」

彼女の右足はみるみる腫れ上がってゆく。

「ラビ、この子を診せる所に案内して」

「…うん…ココ大丈夫なの？」

心配そうにラビはシンに抱きかかえられたココを見る。

「大丈夫だから、早く行こう」

走り出したラビを追ってシンも走り始めた。

腕の中の女の子、ココは水の中がよほど怖かったのかずっと震えている。

シンはそっと、ココの頭に手をまわし能力を使う。

ココの中の記憶の在り方は泡のようにプカプカ浮いていて、その中から水の中で見た恐怖の記憶を勢いよく引き抜いた。

シンの中に痺れるような味が広がる。

苦っ！

こういう記憶は大体、涙が出るほど不味い。

そして頭の中に違和感が広がる。知らず薄っすら涙ぐんでしまう。

しかし、幼いココのトラウマになるよりましだ。

きつとココの中には落ちる瞬間と助け出された所からの記憶しか

ないはずだ。

三、金の王子様と能力者の性？（前書き）

短いです。

三、金の王子様と能力者の性？

先日シンが世話になった病院へ駆け込むとココを医師のサイモンに引き渡す。

彼は素早くココの身体を確認すると、足の治療を始めた。不安げにラビはシンの横を離れなかった。

目の前で流されるココを目撃したのだ。怖かったのだろう。嫌がれるのを承知で頭を撫でてみる。

案の定、ラビは横に飛びのいたが元気はない。

「シン、お前えの応急処置のおかげで大事には至ってない」

サイモンはひと段落着くと、振り返ってにかっと笑う。

「ココ、大丈夫なの？ 起きないの？」

一緒に遊んでいたラビは、サイモンににじり寄る。

「大丈夫、大丈夫。今は薬で眠ってるだけだ」

ラビは一安心したらしく、ココの顔を覗き込んでしばらく離れなかった。

「シンって色々できるようだね」

感心したように、呟いたのはオリビアだった。

「えっ？」

シンは食事が終わり一階のソファに腰掛けてオリビアに借りた本を苦心しながら読んでいるところだった。

「どういうこと？」

視線を上げて聞き返すと、食器などを洗い終えたオリビアがシンの隣に腰を下ろしながら答えた。

「サイモンさんに聞いたよ。応急処置できるんだって？」

それも、すつごく的確な。どこで、習ったの？」

興味有り気にオリビアはこちらを見ている。

「どこで…うーん。王都の…学校で習ったんだ…」

本当は、軍の基礎知識として叩き込まれたんだけど。

簡単な手術もできるが、シンのドジぶりを知る者は頼んでこない。多分、大事件が起きると思われていたのだろう。

「学校？ 行かなかったんじゃないの」

オリビアが首を傾げる。

自分が、オリビアに告げた言葉を忘れていた。これじゃ矛盾が生まれるではないか。

「…あ、仕事に就いてから行かされたんだよ」

「ふーん、そうなんだ。何していたの？」

「仕事は…簡単な情報整理とか」

目線を合わせずに、そらしつつ答える。

「でも、畑仕事も詳しいってココが言ってたわよ。それは？」

次々と核心に迫る質問を投げられ半ば自棄になって言う。

「実家が、農業をしていたんだ。とっても貧乏なね。だから、家を出て王都で仕事をしていた」

「そうか、だから両方できるんだね」

納得したように笑うオリビアにシンも尋ね返す。

「じゃあオリビアは、あの館でどんな仕事してるの？」

「お館様の仕事を、手伝っているんだよ。言ったじゃない。大体シンも何で隣国に行こうとしてたの」

オリビアが、すねた様に顔を逸らす。

「どうやら、オリビアはシンにその事について話すつもりはないらしい。」

今日は互いにここで諦めるしかなかった。

三、金の王子様と能力者の性？（後書き）

シンがちゃんと自発的に能力を使っています…！

四、変化 ?

数日間、シンはオリビアとラビの手伝いをして過ごしていた。

その日もオリビアに頼まれたお使いに出ていた。

ココを助けて以来、村の人の態度は大分柔らかくなっていた。

料理に使う香辛料を買っているところに声を掛けられた。

「シン」

名前を呼ばれて振り返ると、見たことの無い甘栗色の髪の子が立っていた。首を傾げていると少女はふわりと笑う。

「覚えてないかなあ？ 意識無かったもんね。私、オリビアとシンを運んだマキ・コーンっていうの」

「あ、スターチの…」

「そう、姉だよ」

そういわれて見ると彼女の顔立ちはスターチと似ていた。

広場にいくつか出されていたベンチのひとつに並んで腰掛けた。

「この前は運んでくれてありがとう」

「どういたしまして、重かったのよ…。ねえ、どう？ この村には慣れることできた？」

「：微妙な感じかな。前よりは馴染めたけど：なんだかあんまり印象は良くないみたいだ」

「村人はそうでも、お館様は貴方に興味があるみたいね」

「え？　なんで!？」

シンはお館様に会った事がないのにどう興味を持つって言うんだろう？

「だって、オリビアが貴方の事面倒見てるじゃない」

「そりゃ、そうだけどそれと何か関係あるの？」

「ー：お館様の屋敷の家にいる事自体がお館様の意思だと思うけど。ごめん、私にもはっきり分からない」

言い出しておいてごめんね、とマキは恥ずかしそうに笑った。

マキの指摘は確かに正しい気がした。シンを見ているのはお館様の意思。お館様につきっきりで手伝いをしているのはオリビアなのだから。

「じゃあ、オリビアは何て言ってる？」

マキの少し探るような視線に、躊躇いがちに答える。

「僕が村にいる事が大事みたいに言ってたけど…。あ、館で一緒に働いてるんでしょ？　話聞かないの？」

つい癖で反射的に探りを入れてしまった。

一瞬、間があって曖昧にマキは笑った。

「うーん、私働く仕事自体は違うからね…それに最近あの子あんまり口開かなくて」

「マキは館で何してるの？」

マキはどうしてか頬を若干染めて小さく呟いた。

「成人したばかりだから、掃除とか病院で書類整理する手伝いとか…」

「楽しい？」

思わず訊ねると嬉しそうにマキは更に頬にえくぼを作った。

「うん。とっても。シンは外では何か仕事してたの？」

「…あんまり楽しくない仕事だったなあ」

「そうなんだ。じゃあこれから、何かいい仕事見つかるといいね」

「ああ」

マキの嫌味のない真っ直ぐな言葉にシンは頷いた。

なにか自分にも出来る事を見つけなくてはいけない。
軍で叩き込まれた技術など使わずに、マキみたいに純粋に楽しい
と言える仕事を…。

これからまた病院に行くというマキとはそのあと少し話をして別

れた。

頼まれた物をすべて買って家に戻る途中、館を見上げる。

いつも思うのだが、あまりにも人の気配がなさ過ぎる。

マキやその家族だって使用人として使っているはずなのに…。

それでも他の軍人よりも厳しい訓練を受けてきたシンは、肌で違和感を覚えていた。

ふと、二階の窓に人影が映る。

しかし、すぐに姿を隠した。

「あれが、この村のお姫様？」

長い髪が見えただけで顔は見られなかった。

オリビアだったかもしれない。けれど、オリビアだったら顔を出して手くらい振りそうだとシンは思った。

衝動的に確認したくなり手に持っていた荷物を家のテーブルに置くと、踵を返して再び外に出た。

四、変化？

使用人が使う勝手口が家の裏にあるのは知っていた。

裏口だし村人が入ってくる所でもない。

そこから、周りに人がいないことを確認して入る。

そこは台所などに通ずる廊下になっているらしいかった。多分、使用人しか使わない廊下だ。薄暗く色んなものが置いてある。

廊下の先には、扉がありどうやら館の本物の廊下に出るようだ。人と会わぬうちにシンは、扉の奥に入った。

やはり豪華に飾られた廊下に出た。階段の真横だ。

先程、窓から見えた人影は二階だったはずだ。階段を上る。

二階は明るい照明と綺麗な模様の絨毯が敷き詰められている廊下だ。

銀細工が村の工業と聞いていたが、飾られている観賞物は信じられない位の精巧さだった。きっと、王都にはこの昔ながらの技術は残っていないだろう。

それが、シンには白々しく感じられた。

オリビアから、少女が一人で住んでいると聞いたからだろうか。一人で住むには寂しすぎる立派な屋敷だ。

廊下には、扉がずらりと並んでいる。

シンの目算では真ん中から右よりの部屋だった。歩きながら感嘆する。部屋と部屋との間隔が、かなりの距離があ

るのだ。オリビアの家一つくらいは、一部屋に収まるのではないだろうか。

見当をつけて、扉の前に立ち止まる。

そこからは声が聞こえる。

しかし、独り言なのか声は一つ。

やっぱり、世話になっているのだから挨拶は必要だ。それに彼女はキフィの妹かもしれないと、自分勝手に理由をつけてシンはドアノブに手をかける。

「何してるの！ どうして、ここにシンがいるの？」

シンはその言葉に慌てて手を引く。

「…ラビ」

ラビは反対側の正式な階段からやってきたらしく駆け寄ると、睨みつける。

「オリビアが来ちゃダメだって言ったんでしょ？ どうしてくるの」

明らかに、年下のラビに言い訳ができない状況。

「ごめん。どうしても気になっちゃって」

ここは素直に謝るしかない。

「もう！ 家に帰ってよ。オリビアに言ってやるんだからね」

「わかった。あっ…ラビは、何しに来たの？」

別れ際に尋ねると、ラビは誇らしげにこう言った。

「僕、お仕事に來たんだ。大事な、ね」

夜、久々に雨が降る。

いつもなら、絶対に置き忘れたりしない大事な上着を、外の畑に忘れてしまった。

エンジ・ホウクは、ため息を吐きながら村の塀の扉を開けた。

今日に限って、雨降り。

きつと、彼女にもらったジャケットはグシャグシャだ。

まだ若い彼は、村の者の言う人攫いの話をあまり信じていなかった。

最近大人たちが異様に警戒しているのはお館様が危険を告げているから。

でも年齢的に同じくらいのお館様は彼にとってはただの友人で、あんまり重要な気がしていなかった。

軍人に対する嫌悪は人一倍だったが。

自分のジャケットを見つけ、屈みこんだ時だった。
森の中に誰かいる。

ちらり、と木の影から頭が見える。

村人か、いや、あれは…人攫いだ。

『軍人は、人攫いをするから夜に外に出るんじゃない』急に母の言葉を思い出す。

——ああ。

大人の言う事は聞かなくてはいけないということだな。

こっちに気づいてはいないようだ。身を低くして、扉がある茂みまで駆け寄る。

扉から、身体をすべり込ませると、エンジは皆に知らせるように大声で叫びながら駆け出した。

四、変化 ?

ある日の昼下がり。

「…しようがないんだよ」

ソファに寝そべりつつ、シンは呟く。
言われて、ココは肩を落とした。

シンを遊びに誘いに来たらしいのだが、今、シンは外に出られる状況でなかった。

先日の夜、エンジという銀細工屋の息子が、森で人攫いの軍人を見たという話が村に広がっていた。

ただでさえこの前、館に勝手に入ったことにラビに睨まれていたのに今やほとんど無視扱いである。

シンには何も関係ないことのようなだが、その軍人らの仲間が偵察として入っているシンではないか、と噂されているらしい。

まず、どうしてこんな森の中まで人攫いに軍人がやってくるのかわからない。シンの知る限りでは、そんな事をしているなんて聞いた事がないのだ。あのキレイな銀細工が欲しいとかそんな事だろうか？

今の状況を考えるなら、脱走兵の自分の追跡で現れた可能性もある。しかし、完璧な工作はしてきたはずだ。その技術を仕込んだのは、皮肉にも彼らなのだが。

しかし、軍人による人攫いの事実はあるらしい。ここ数年無かったのに、軍人が偵察に来ているのは、シンが情報を渡していると疑われている。

「…ラビとオリビアは館に居るんだよね」

「そうだよ。オリビアはこの前からずっとあっちにいるんだ」

がっかりしたココは手を振って帰っていった。

シンはココにもらった焼き菓子は何気なく口に含んだ。途端、シンは身体を起こす。

「…味が、しない？」

どういうことだろう。朝のオリビアが作った食事には、しっかりと味がついていた。

こここのところ、空腹を感じていなかったため忘れていた。普通、記憶はないはずなのだ。記^あ

「オリビア…？」

この事については、少し彼女に聴いてみるべきかも知れない。

オリビアといえば、こここのところ体調がよくないようだ。

しかも、ずっとお館様についてあちらの部屋にこもっている。

夜間に呼び出されるようにして部屋を出て行く音も聞いたことがある。ここに居るのは睡眠と食事だけこちらだ。

いつか、倒れてしまうのではないかと心配だった。

夜、オリビアが疲れた様子で食事を作る。

「オリビア、僕がやろうか？ 疲れてるようだしさ」

そう声を掛けるが、オリビアは首を横に振る。
絶対に料理は譲らないと態度で示され諦める。

「オリビアさ、少し休んだら？」

「…私には今、沢山の大切な仕事があるからダメだよ」

仕方ない事だ、と呟くように言う。

「けれど、こんなじゃ…」

「だったら、シンが出て行けばいいんだ！」

声を被せる様に後ろからラビが言う。

「シンが来てから、この村おかしくなったんでしょ？ だったらシンが出て行くべきなんだ」

「…」

ラビは、シンを睨みつけている。少しは打ち解けていると思っていたがどうやら違ったようだ。

「ラビ…止めなさい」

オリビアがたしなめるように言う。

シンも心の中で思っていた。自分がおかしくしているのかもしれ

ない。村だけじゃないこの家族も。それでもシンは上手く言葉を紡げない。

ラビは首を振る。

興奮した様子で叫んだ。

「オリーは、ただでさえ大事な仕事をしているのに、こいつがいるから！」

オリビアがラビを振り返る。

「ラビ！ いい加減にしなさい！ どうして、そんな事言うの?! そんなラビ嫌いつ」

オリビアの苛立った大声にラビは涙を溜める。

「どうして？ オリビアがキツイのシンの所為じゃないか！ …僕、体の調子悪かったの知ってるよ。僕は、オリビアのためにこいつ追い出そうとしてるのに！」

泣き始めたラビに、オリビアはなだめるように言う。

彼女の目頭も薄っすら赤い。

「ありがとう…でも私は、大丈夫。言ってるでしょう？ シンはお客様だから、って。本当なんだから」

オリビアがラビを抱きかかえたところに隣に住むスターチ少年が駆け込んでくる。

「オリー！ 大変だ！ 村の外に数人の軍人がいるって！ 近いん

だ！ 見張りの奴が支持を待ってる！」

どこからか走ってきたらしく息を切らしている。

それはこの前の目撃の噂から強められていた見張りからの報告だった。

ラビの涙をぬぐってやると、床に下ろしオリビアはスターチとラビに言う。

「二人とも、村の代表を閣議の為に館の接見部屋へ集めて。それから、他の村人は広場に招集する事。もしもの時は館の中に避難してもらって。分かった？」

二人は頷くと、一目散に出て行った。

「…僕は何を？」

思わず尋ねると、オリビアは唇の端を吊り上げる。

「あなたは、部外者なのでここに」

そういい残して、オリビアは館に向かった。

「僕ってそんなに役立たず？」

シンは苦笑して呟いた。

五、弱虫の意地？

シンは、白い上着と手袋を着て家から出てばれないように広場へ向かった。（これでも元諜報部なんだ）このところ外へは出ていなかったため新鮮に感じる。

広場には多くの村民が集まっていた。

しかし、どうして集めたりするのだろう。無防備な村人は本来ならば家から出させない方が安全だろうに。

人々を横目に村の出口へと歩く。

かやの外なら、自分の目で確かめてみるしかない。

自分の力で解決できるのなら、それでいい。

最初の日にオリビアの後について歩いた通りを、今日はひとり逆に歩いてゆく。

しかし、学校といわれた建物を通り過ぎたところで病院から人が出てくる。全ての人が広場に集まっていると思ったが計算違いだ。

病院から出てきた人物は、シンを見止めると不敵に笑う。

「ははん。やっぱりお前えさんが、原因かい？」

そう言ったのは、医師サイモンだった。

「：分からないから、確かめに行くんです」

シンは、そう告げる。

「確かめる？ 逃げるの間違いじゃないのかい？」

シンは、ため息を吐く。

こんな事をしている場合じゃないのに。

「僕は、確かに軍の人間でした。けれど、もう僕は軍の人間じゃない」

「つまり、脱走してきたって事か？」

意外そうに尋ね返す。

「…そうです。だから、僕を追ってきたのなら、僕が相手になればいい」

「追ってもらえる自信があるのか。…そうすると、必然的に幹部か」

視線を逸らすシンに、サイモンは近づきながら笑う。

「行けばいいさ。まあ、お前えさんがどんな能力者かは知らないがね」

すれ違いざまに背中を思いっきりばし叩かれる。

「…なんで、分かったんだろう？」

ひりひりする背中に、言い訳のように呟いてシンは走り出す。

門の前には、二人の男が立っていてシンを見ると駆け寄ってくる。

「お前、やっぱり外から来たスパイだったんだな！」

「いや…」

説明しようとするシンに対して、聞く耳を持たない男達は捕まえようと襲いかかって来る。

「違うってば！」

否定の言葉と同時に抵抗して出した右肘で、思いつき一人の男の後頭部を殴ってしまった。男が地面に落ちる。

「何が、違うって！？ 逃げる気なんだろう！ 相方をこんなにしやがって！」

「わわわっ！ ごめん！ でも本当に違うんだよ」

もう一人の男もシンにつかみかかろうとする。

門の前で揉みあっている内に、引っかけ傷が沢山できてくる。

どう考えてもシンは取っ組みあいの喧嘩が苦手だ。しかし、

——っごん！！

派手に鳴ったこの音で決着はついた。

シンの後頭部が門の扉に思いつきりぶつかり、男の顔面がシンの膝にぶつかっている。同時にこけてしまった事で起きた惨劇。

「つてて、またこけちゃった。タンコブ増えちゃったよ。あ、大丈夫？」

痛みには何かと慣れっこだ。

鼻血を見事に噴いた男に律儀に声を掛ける。

フラフラながらも二人とも意識があるのを確認して、勝手に門の扉を押し開く。

「僕が出たら、鼻血君がすぐに鍵を閉めてね」

僅かな隙間に身体を捻じ込みながら素晴らしい残してシンは門の外に消えた。

五、弱虫の意地？

外に出てみると、特に人影は見えない。

まあ、堂々という人攫いも馬鹿だが。

しばらく森の中を進みある程度の勘で当たりを付けて立ち止まった。

顔を一巡りさせると、シンは自信有り気に声を張る。

「そこにいる軍の皆さん、こんな辺鄙な村に何か御用があるんですかねえ？ みんな村人が怯えてますよ」

もちろん何も反応が無いのを見ると、続ける。

「僕は、王都軍特別上級能力士官シン・ナカムラ」

一種の賭けだが、何ができるか能力は極秘で知らなくとも、上級士官シンの名を知らない軍人はそういないはずだ。

しばらくの静寂の後、シンが見当をつけていた木の影から人が現れる。

「私はジョージ・ソード中尉であります。何故、あなたのような方がここにいらしゃるんですか？」

驚きを顔に貼り付けた中年の仕官だった。シンにも見覚えのある顔だ。多分、能力者の館に付いている幹部か。

それも、自分がらみでは無く本当に人攫いだ。これはまだ自分の

脱走情報がはいってないな。

「そっち、何人いるの？　僕は、このプレセハイドに秘密裏に潜入していたんだ。すっかり皆騙されてるよ」

上着のポケットに両手をつっ込んだまま愛想よく笑う。

「我々は上層部の指示でこちらに四名で来ております」

「…皆、出てきなさい」

ずっと目を細めシンが落ち着き払った声で命令する。

森の奥から、仕官より若い者たちが現れる。

髪の高い女性が一人と色が黒い青年と黄色い髪の少年。

「これで、全部？」

シンは、仕官の正面に立ち尋ねる。

「はい。…ぶっ！」

シンの手の平は直後、仕官の顔面に張り付いていた。その手にはすでに手袋は無い。直前まで手袋をしていた方が、記憶を食べる能力が増すのだ。

目を見張る部下たちの前で、シンの顔は恐ろしい程の無表情になっ
てゆく。

手の平から入ってくる情報は恐ろしく残忍な任務内容だった。

この村の推定住人の人数やある目標の捕獲が任務内容として出て

いた。どろどろと苦い何ともいえないものが胃なのか脳なのかに広がっていく。こんな物を消化するのが嫌でシンは逃げてきたのに。

「き、貴様！ ソード中尉に何を！」

引き攣った顔で、叫んだ男がシンに飛び掛ってくる。

大柄な青年だった為慌てて、意識の無いソードの身体を彼に押しやる。

「別に。ただ任務内容とか、僕に会った事を読み取って確認しただけだよ」

上官の身体を投げやられた為に無下にできず、男は黄色い髪少年にソードを引き渡す。

「確認はどう？ 貴様、馬鹿にしているのか」

殴りかかってくる男にシンは挑発するように言う。

「別に。セイレン君のこと馬鹿にしてるつもりはない」

「な、何で俺の名前……」

腹に一発拳が決まったのにも関わらず、シンは続ける。

「女の子がセンネちゃん、男の子がトリパニス君でしょ？ ちゃんとソードさんが記憶しといてくれて良かったねえ」

ソードを抱えようとしていた二人も、動きを止める。

「…それに、キミらは能力者ではないようだね」

ニヤリと笑ったのはシン。

色黒のセイレンの腹に仕返しとばかりけりを入れる。

しかし、予想以上に鍛えられた腹に跳ね返る。

「能力者の意味が分かった、アトヨミ過去読みかよっ！」

セイレンにその足を捕らえられる。

「わぁ！」

頭をぶたれた上に、足を上へ引っ張られて後ろに転びそうになり、足を掴んだ手を両手で思いっきり掴み返す。

「うーん、惜しいなあ。それに僕的能力って、実は頭にだけじゃなくどこからでも力使えるんだ」

不敵に笑って目を閉じる。

直後、体勢を崩してセイレンごと地面に崩れる。

「僕って、考えなし…」

こんなときにも相変わらぬのドジで自分が情けなくなる。

シンは諦めたように呟いて、セイレンに押し潰された状態から這いようとする。

しかし、敵は彼一人ではなくて、もちろんあと二人残っている。

もがいている間に、トリパニス少年に顔を蹴られる。殴られたり蹴られたりしている間に段々意識が遠のく。

ああ、こういう時特別な魔法とか使えたらいいのに！

必死に這い出ようとまだ手はもがいているのだけれど。

――ガンッ！

何かがぶつかる音に目を開ける。

トリパニスに大きな木の枝を振り上げているのは、なんとオリビアだ。

「ちゃんと、家で待てって言ったでしょう！」

意識が戻ってくる。

トリパニスが相手じゃきつと細い女の子のオリビアは負けてしま

う。
必死でセイレンの身体の下を抜けた。立ち上るとシンも同じように近くにあった木の枝を拾い上げてトリパニスに振り上げる。

しかし、シンが考えなしに持った枝は重過ぎて手のひらからすっぽり抜けてトリパニスに直撃する。

「あれま？」

見事に鳩尾にヒットして悶絶するトリパニス。それでも止めを刺そうとするオリビアを止めて、彼の額に手を翳す。

彼の中から記憶を取り除く。

一気に色んな記憶を取り入れるのはかなりしんどい。自身でも気持ち悪さに顔色が悪くなるのを感じる。

オリビアには見せられない。

顔が見えないようにして立ち上がりあたりを確認する。

「あれ？ オリビア、後一人は？」

あとは髪の長い女だったはずだ。先程まで、ソードについて戦闘に加わっていなかったはずなのに。

「…逃げた、みたい」

オリビアは、辺りを見回しながら言う。

「不味いな」

このままでは、王都軍に自分がこのプレセハイドに居る事がバレてしまう。

まだ、あの女の記憶を消していない。

「何が、不味いの？ いいじゃない、このまま居なくなってくれれば」

オリビアの普通ならもつともな言葉も受け入れられない。

「僕、追いかけるよ」

走り出そうとするシンをオリビアはすかさず捕まえる。

「ダメ、こんなに怪我してるのに無理だよ。顔色も悪い」

真剣な顔で告げられる。

確かに顔も、足首も、腹も、なんだか背中も痛いけど。

「僕は、行かなきゃいけないんだ！」

引き止めるオリビアを振りきって森のほうへ数歩、歩こうとする。焦燥感でいっぱいなるこの村へ長く滞在していた事で軍に自分がこれから行く国の方向がばれるわけいらない。

「何を隠してるのよ！ シンがそんな風だから村の人たちが心配するんでしょ！？」

「関係ないだろ！ 第一オリビア達は巻き込まれないほうがいいんだ！」

それでも精一杯の力（意外に馬鹿力）でつかんでいるオリビアの腕を振りほどこうとして揉める。

ガサツ―ガサガサ：

森のこちらに近づいてくる音に二人とも動きを止める。ぴよんと、森から人影が現れる。

「なあーに？ 痴話げんかでもしてんの？」

呑気な言葉にシンは振り返る。

そこに悠然と立っている人物に絶句した後、シンは一言絞り出す。

「…キファイ」

そう呼ばれた少年は満足げに頷くと、それまで後ろに反っていた右腕を前に引き出す。

「喧嘩の原因ってこれえ？」

これ、と言われたのはシンが追いかけてようとしていた女、センネだった。

六、王子様と踊らされた弱虫？

豪華なランプは色んな色と模様を浮き上がらせて、部屋を彩っていた。こんなに豪華で大きなランプは村のどこを探してもここにしかないだろう。

シンは、ランプを睨みつけながら無然とソファに腰掛けていた。

「…心外だよ。まったくもって」

珍しく怒りを含んで発せられた言葉に、向かいに座っていたお館様・キフィは首をすくめた。

あっさりとキフィは自分がお館様であると認めたのである。彼の隣にはオリビアが腰掛けている。

入ったかったこの館のお館様の部屋も、今ではシンに何の魅力も感じられない物になっていた。

「そう、カッコなさんなって」

そう言ったのは、シンの手当てをしていたサイモンだった。

シンの体中に、増えた傷は生々しかった。

昔から皆に可愛らしいといわれた顔も、今のところ半分は包帯で隠れている。軍用靴の底は、柔らかい顔の肌を沢山傷つけていたのだ。

「…悪かったって言ってるだろう？」

キフィは、いつもの砕けた顔を神妙にして言った。

「全部」

「は？」

「全部話してもらうからね」

シンの言葉にキフィとオリビアが苦笑いして頷いた。

「どこから話そうかな」

「俺が話すよ。まず、このプレセハイド村の事から、それでいいだろう？」

キフィが二人に確認するように聞く。二人が頷くのを確認して話し始める。

「プレセハイドの意味は分かる？ 昔の言葉で、隠れ処という意味」

「隠れ処？」

「そう。隠れなくてはいけない理由は：俺たちクレイ一族の能力者が国から狩られてしまうから。」

もう遙か昔の話だけだね。クレイ一族には昔から今、軍に居るような能力者が多くいた。その頃は、まだ王都なんかにも住んでいた。しかし、ある一族の男が自分の能力を王に売り込んでしまった。その為に王は、一族の能力者を全て我が物にしようとした。そこから逃げ出して森の中に造られたのがこの村」

ラビの書齋にあった本の内容に近い話だった。

「じゃあ、ここに居る人は皆、親戚なの？」

シンが、キフィに言葉を挟む。

「それは、ほとんど皆が親戚かな。能力者たちも起源はクレイ一族だから、国中に逃げた人たちの遺伝子で能力者が生まれるのも親戚になる。他の国で生まれは違ってもこここの存在を知ってやってくる人もいる」

キフィがサイモンを指差す。

「例えば、このサイモンとか。まあ、大雑把に言えば、君も皆も俺らの家族って事」

キフィが、にやけつつ言う。

「続けるね。今、この村には五十人以上の能力者がいる村人の約四分の一。もちろん、オリビアもラビも」

「そんなに…？」

普通の人口での能力者出生率が0.2%しかないからそれからするととんでもない数字だ。

「けれど、私たちはシンがこの村に来る事を村のどの能力者もサキヨミができてなかった。

だから、皆は恐れていたんだ」

オリビアにじっと見られ、顔をそらす。

確かに、能力の強いキフィはサキヨミ出来た。

けれど、他のサキヨミにはシンのことを読めなかったのなら、自分の事を一切読まれなくするという軍の訓練の賜物だ。

「ねえ、この村の能力者は国に捕まらないの？ いや…違うか、キフィが軍に来たか」

キフィが、自分を指差して頷く。

「そうなんだよ。この村からは滅多に能力者を軍に出さない。何十年も諍^{いさか}いがあつて…最近ある事をきっかけに国と約束事を作った」

その言葉を聞いてオリビアが苦い顔で続ける。

「能力者一族から、約十年に一人を軍に差し出す。

だから、シンに言ったでしょう？ 短命な一族だって。ただでさえ能力者は命が短いのに。皆、自分から犠牲になって行くんだ。少しずついなくなる…キフィも…」

オリビアが唇を噛んで何か堪えている。

横でキフィは諦めたように笑うだけだ。

「俺さ、四年前にちゃんと能力者の館に入っただろう」

キフィはじっと自分の手を見つめながら言葉を紡ぐ。

「…ああ、だからあんな中途半端な時期に来たんだな」

「でもさ、村は俺が居なくなると的確なサキヨミできる奴が居なく

なるんだ。

奴らはそれを知っていて、俺が遠戦行くと村に能力者を攫いに来るんだ。どうしようも無いじゃん？ 妹一人に村任せてんの俺、村からすっごく離れたところに居るんだから」

「だから、僕を？」

自分を見つめるシンに、キフィは答える。

「…まあね。最初シンに出会った時はお前に頼む日が来るとは思わなかった。軍にすげー従順でムカついた、反抗心のカケラも無かったしさ。俺は村に帰りたくて堪^{たま}ないのに。でも、臆病なくせにいつも人を助けてただろ。苦い・気持ち悪いって言いながらもコエケシしたりさ。

正直、救われた。だから、お前が軍から逃げるなら、まだ俺よりチャンスがあるお前のその手のひらになら、村も妹も任せていいと思った」

「どういたしまして」

臆病と言われてムツとしないでもないが、臆病で弱虫であの軍の檻の中から逃げていく自分を、頼りにしてくれたキフィがかっこよく見えた。

「そういえば。ねえ、もう一人のお館様は？」

キフィが多分そうである事は薄々分かっていたが、この館に籠もっているはずの妹はどこだろう？

こんな騒ぎでも人見知りして隠れているのだろうか。

「？ 居るじゃん、目の前にさ」

キフィが指差しながらきょとんとしている。

「え…？」

そっち指しちゃだめだろ？ シンの思考がしばらく停止する。どういうこと？ とりあえず視線を向ける。

「ごめんなさい！ 実は、私がお館様です！」

キフィの手とシンの視線に晒されたオリビアが、慌ててがばっと頭を下げる。

「だって、お手伝いでしょう？ 誰もオリビアのことをお館様なんて呼ばなかったし、小さな家に住んでるしさ」

「オリビア、まだあっちに住んでるの？」

キフィも別の意味で驚く。

オリビアが、申し訳なさそうに言う。

「…シンが、本当にキフィの信用に値するか確かめたくて」

「僕、騙されてたわけ？」

シンが呆れて尋ねる。

「違うよ。私、仕事以外で嘘は言ってない」

首を振るオリビアは真剣に弁明する。

「シン、まあ俺が悪いんだから、オリビアの事は許してよ」

彼にしては珍しく妹ヘフォローを入れたキフィにシンは大きく頷く。

「そうだな、お前が全部悪い」

シンの言葉に不満そうな顔をするキフィだった。

六、王子様と踊らされた弱虫？

一度話を中断し、シンとキファイ、サイモンで縛り上げた四人を館の地下牢に放り込む。

目隠しをした彼らのシンが記憶を抜き取ったのを確認する。

シンのせいで怪我をした男達を治療すると言いサイモンは帰って言った。相変わらず少し意地悪な言い方だった。

「こんなに少ない人数だったなら本当は必要は無かったんだ。昔の大規模なものに比べたらなんでもない…」

キファイは寂しそうに笑った。

「でも、俺が“生きてる”うちにオリビアや皆に会いたいと思っていたんだ。それにお前もこの村へ向わせたしな」

「そんな…」

真剣な顔に言葉を紡ごうとするが遮られる。

「まー、俺様のことだから長生きして、あと何十回でも会えるけどお」

おちやらけたように笑ってシンにいつもの親友の目を向ける。でも、その中に先ほど覗かせた兄の顔も含まれていた気がする。いつもキファイは自分のこともそんな風にみていたのだろうか。

館の中にはいつもこんなに大人が居たのかと思うほどの人が居た。広間に集まりキフィの姿を見ると嬉しそうに皆、頬を緩ませた。

軽く偉そうな数人と言葉を交わすとさっさと踵を返して戻ってくる。

キフィは、オリビアが住んでいる家に行きたいと言った。

その言葉を誰も止めることなくしてしなかった。

「はあー。やっぱりこっちが落ち着くなあ」

館の椅子に比べたら天地の差ほどあるくたびれてガタガタのテーブルの椅子に腰掛けて、キフィは呟いた。

懐かしむようにテーブルの角を優しく撫でている。

「どうして、オリビアはあっちに住まないの？ あっちのほうがふかふかでしょベッドとか」

シンはそれを横目に尋ねた。

「…寂しいから。お兄ちゃんともここに住んでたし。昔は、沢山の人が館に住んでいたのに自分が独りぼっちなのが余計にわかる」

オリビアがお茶を入れながら薄く笑った。

キフィとシン、ラビの分を注ぐと皆にカップを差し出す。

ラビは家で留守番を言い渡されていた為、帰ってきた大人たちを見て喜んだのは言うまでも無い。

特にキフィを見たときの反応は凄かった。

おくびにも出さないけど、きっと一人で怖い思いをしていたので

はないだろうか。

「あ、ラビも能力者なんだろう？ クレイ一族なら」

シンに言われ、ラビはキフィの横で上機嫌に言った。

「僕は、アマゴイなんだ。いつもこの村に雨を連れて来る」

「おっ、ラビの能力はそれかあ。いつの間にか大きくなっちゃって昔はこんなだったのにな」

かなり狭い幅に腕を広げてサイズを示していて、シンは心の中でそれはないだろうと突っ込んでいた。

キフィがラビの頭をわしわしと撫でる。

ラビの嬉しくてたまらない様子に、子供らしい顔をラビが持っている事を知る。

ちらりと隣に座るオリビアを見ると聞いてみた。

「じゃあ、オリビアは？ 僕、聞きたい事あってさ、オリビアが作る料理には味があるんだよね」

「何言ってるの、シン。当たり前でしょ」

ラビが馬鹿にしたように言う。

「シンが言っているのは、記憶が在るって事だよ。シンも能力者なんだ」

「ええ？ シンが能力者なの？ 信じられない！ どういった神様

の悪戯なわけ？」

ラビが興味津々に身体を乗り出す。

「信じられないって…。」

幼い子供辛辣な批評に少なからずショックを受けながら、

「それで、オリビアは？」

シンが、尋ねるとオリビアが頷く。

「アトヨミの能力者…最初のシン拾ったときに、シンの意識揺らいでたから読んでしまつて。私、能力がまだ不安定なの」

「読んだって？ 何を？」

仕事の関係上、シンの意識のガードは他の能力者よりかなり固いはずだ。それに軍の隠蔽している情報にかなり関わる。

「ちょこつと。キフィと話していることか」

「…そこ、俺わざと読ませようと思って置いて置いた部分だなっ！ やっぱり俺の妹だ」

「はあ…？」

とりあえず変なところを読んではないようだったが、この兄妹は自分の知らないところで何してるんだ。

六、王子様と踊らされた弱虫？

「で、シンの能力は？」

ラビが待ちきれないと声を上げる。

「…コエケシ、だよ。皆の中の声、記憶をアトヨミみたいに覗くんじゃなくて、食べてしまうんだ。そうしないと、生きてゆけない」

シンは諦めたように、諭すように告げた。

「…コエケシ…」

ラビが、こわばった顔で繰り返す。

「ほら、俺の部屋使ってたんだろう？ あそこの本棚にあったろう。確か、三百年前の爺さんが持ってた能力。そうそうあるもんじゃない」

頷きながらラビは尋ねる。

「じゃあ、シンはこの村で誰かの記憶食べちゃったの？」

「…ココの記憶を少しだけ」

シンが苦笑いで、両手を挙げる。

ラビの顔が引き攣り半分泣きそうだ。彼の中でのシンのイメージが一新されそうだった。

「な、なんで?!」

「川に落ちてあんまり怖がってたから少し怖くないように、ね。特に変なことしたりしてないし」

「な、なんだ。…でも、お腹すかないの？」

シンは、曖昧に頷いた。

「だからね、オリビアのご飯には色んな記憶の味がしたんだ。不思議なことにね…」

シンはじっとオリビアを見つめた。
オリビアが、諦めたように笑う。

「少しだけ、ご飯作るときに能力で浮き上がらせておいたの」

「浮き上がらせる？」

そんなの聞いた事がない。

「…オリビアには、もう一つ能力があって、記憶を癒す力のような物があるんだ。だから、能力も安定しにくい」

キフィの言葉にシンが絶句する。

「能力が複数あるっていうのか？」

「私だけじゃないの。一族の直系だけなんだけど、たまにそういう事があるみたい」

「そういう奴は未知の能力があること多いから、きつとできたんだろうね。さっすが俺の妹♪」

キフィが平然と言ったのける。

彼はラビの部屋の本棚の全てを頭に入れているのだろう。

見た目によらず意外に真面目に勉強とかするタイプなんだ。普段の不真面目さに苦勞させられたシンとしては納得いかないけれども。

「あーそろそろ俺、あっちの館に戻るわ。もう寝なきゃな」

話を打ち切ってキフィが立ち上る。

「ええ！？ 僕の部屋で一緒に寝よう？ キフィのベッドそのまま使ってるんだよ」

「おっ、そうか。じゃ、一緒に寝るかなあゝちっと狭くないか？」

キフィとラビは二人を残して二階に上がって行ってしまった。

「…黙っててごめんなさい」

オリビアが声を潜めて言う。

「まあ、お互い様でしょ。僕も、脱走兵だと言ってなかった」

伺うように横目で見たオリビアに笑いかける。

「キフィは良い兄だね。僕は、小さい頃に親に売られたからよく分からないけど。きっと僕の兄たちもあんな感じだったのかな？　…でも、キフィは女の子にしか優しくない。そして特に僕には優しい」

「うん。たまに、手紙をくれるけど私の心配ばかりしてるみたい」

「なにそれ、何か想像できないかも！」

本気で吹き出しそうになる。

オリビアもつられて笑う。

シンはこのままずっとこの村に居られればと、心の中で思った。優しい人が沢山居る、この村でならきっと自分が人を傷つける事をしなくていいのでは、と。

翌朝。

キフィが広場に村人を集め、しばらく話をした。

この村に来ていた軍人の事や、シンがスパイではなく自分の友人である事などだ。

そして、最後に自分がこの村にやはり残れないということ。

話し終えて、館の廊下を歩きながらキフィは笑う。

「なにそんな顔して？　皆、俺がここでまた暮らすと思ってたの？　俺は、村の代表の能力者だ。今だって前線のサキヨミを、俺が居な

い間の分を書いて置いて出てきただけだよ。

俺が戻らなかったらきつと、この村は軍にやられてしまうからね。今日、牢の奴ら連れて、王都に戻るよ」

オリビアがこわばった顔でキフィの後を追う。

「キフィ…、行っちゃうの？」

オリビアの涙声にキフィは立ち止まる。

「俺は、皆みたいに死んだりしない。ごめんな、村の事全部背負わせちゃって」

キフィはオリビアを抱き寄せると、笑った。

「いつか、戻ってくるから。それまで、お兄ちゃんを待ってなさい」

キフィは、接見部屋で王都へ戻る準備をすと言って村の代表者とオリビアを呼び寄せて籠もってしまった。

昼食を取った後、キフィは旅支度をすっかり済ませ、目隠ししたソード達を連れ村の出口に立っていた。

声を出さないようにして屈強な村人を数人護衛で連れて行くらしい。

「オリビア、村の事を頼んだよ」

「わかってる」

意地で泣きたいのを我慢して、キフィに笑顔を向ける。
そんな二人を見つめていたシンが、口を開く。

「…オリビア、僕も、怪我が治ったらこの村を出ようと思う」

オリビアが、驚いて振り返る。

「どうして？ どこにも行く所無いんでしょう？ ここじゃダメなの？」

「…ラビが泣いて僕を追い出そうとしていた理由が分かった」

「理由？ あの子ただ人見知りするだけだよ」

「違うよ」

シンが首を振ると、オリビアは泣きそうになる。

キフィは黙ってみているだけだ。

「オリビアは、僕のご飯を作るために慣れない能力を使い過ぎるんだ。だから段々辛くなるし、ラビにだってわかってしまう。他にも僕は沢山迷惑かけてしまうよ」

シンは、オリビアに笑ってみせる。

この事は昨日、キフィと話していた時に決めた事だった。

もう、キフィの与えた仕事もしてしまったし、余計な迷惑をこの村に掛ける訳にはいかない。自分の事は自分でどうにかすると決めて脱走したのだから。

「…シン。この村好きか？」

キフィは後ろから面白がるように尋ねる。

「ああ。好きだよ」

「あの家は？」

「うん。凄く久しぶりにゆっくりできた」

キフィは顎に手をやり頷くと、最後に一言。

「じゃ、オリビアは？」

「は？ …ええと…それは…」

「ふーん」

しどろもどろなシンを眺めて、キフィはニヤリと笑う。

オリビアになにやら耳打ちを始めた。真剣に耳打ちに頷いていたオリビアは最後にキフィと笑いあう。

「分かったわ」

「…何話していたの？」

二人は意地悪に笑っただけで何もいわない。

そこにサイモンが見送りに現れて言及できなかった。

見送られて手を振るキフィは、ふと戻ってきてシンに耳打ちする。

「シン。まあ、お前の好きなようにしな、できるものならね」

もちろん、シンに疑問を言わせる暇を与えず立ち去って行く。

キフィはこれから、軍に戻り村へ軍人を送った事への抗議をすると言った。きっと、これでしばらくはこの村も安定するだろう。

自分は少し名残惜しいけど、この村を出て新しい国でどうにかやっ
って行こう。

ドジで何をやっても上手くないけれど、何事もやってみなければ分からない、弱虫な僕でも。

「シン、見て」

オリビアが空を指差す。

見上げると、雲一つ無い晴れ渡った空だ。

これでこそ、僕が好きな季節だ。

終章

シンは、歩いていた。

途中で降り始めた雨に悪態を吐きながら。

「何だって僕はこう、ついてないんだっ」

ずぶ濡れの上着が身体に張り付いているのが気持ち悪い。

キフィとプレセハイドで別れてから、すでにひと月が過ぎていた。

「何やってるの？ 早く入りなよ。濡れてるじゃない」

横の建物から声を掛けられて顔を向ける。

「…もうここまで濡れると、どうでもいい」

ふてくされてそう答えると声の主、オリビアが呆れた顔で手をこまねいた。

「そんな事言っていないで入ってよ。風邪を引くよ」

シンは、頷いて言われたとおり病院に足を踏み入れた。

「おう、シン。また足捻ったって？」

サイモンが、診察室から顔を出す。

「またですみませんね、またで」

シンが自棄になって答える。

診察室に入ると、オリビアとサイモンが待ち構えている。

「ところでなんで、ここにオリビアが居るの？」

「今度はどの位かと思って」

ニヤリと笑うその顔は、キフィそっくりだ。

「…もっと心配とかしてくれよ」

「あら、してるわよ」

「分かってねえなあ。シン、もっと考えてみろよ」

サイモンの顔もにやにやしている。

「考えてもわかんない」

すねた様に、首をそらす。

オリビアに宣言した、村を出て行くという言葉は未だに実行されず
にいた。

まあ、色々な事情で。

「これは、そうだな、一週間くらいか。この前の腕の打撲は大分よくなってるな」

「また、一週間……？」

ため息を吐いたシンにオリビアが言う。

「このままじゃ、キフィが言った事、本当になるかもね」

「キフィが言ってた？」

オリビアが口を塞いだが遅く、顔を上げたシンは聞き出そうとする。

「どういうこと？ この前の耳打ち？」

オリビアの視線が泳いで、サイモンと目が合う。しかし、サイモンは我関せずで決め込んでいる。

「…シンに居て欲しかったら、何か手伝ってもらうとずっと居る事になる、って」

「ずっと…」

「それから、忘れないように言えって、怪我が治ったら出て行くんでしよう、って」

シンが言葉の意味を考えている横でサイモンが吹き出す。

「こりゃいい。半永久的にシンはこの村から出られない。怪我がね

え：くくくつ」

「もう、サイモンさんったら！」

そうかやたらと手伝う事が多くなって、そのうちドジなシンは必ずミスを招く。大体個人的な被害のものが。

意図がわかり椅子に座り落ち込むシンにオリビアが、近づく。

「約束でしょう？ 私のおいしい料理食べられるんだからいいじゃない。近頃は能力加減もわかってきたし」

シンはオリビアを見上げて、思う。

無理に踏み出さなくてもいいのかもしれない。

キフィの隣の他に初めてできた居心地のいい場所は、自分を温かく迎えてくれている。

「そうだね。約束は守るよ」

オリビアは嬉しそうに笑い、サイモンの所へ行く。

穏やかな気分で目を閉じたシンに耳に二人の話し声が流れ込んでくる。

「な？ 今日の賭けも俺の勝ちだろ。アマゴイの時間ずばりだ。運が足りないんだよ、ずぶ濡れだぞ」

「でも、毎回雨の中来るなんて雨降りが好きなのかも知れないですよ？」

…ああ。

僕、やっぱり旅に出たほうが良いのかもしれない。

E
N
D

終章（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございます。
本当に感謝です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0965r/>

弱虫のてのひら

2011年5月24日22時06分発行